

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0000000000		
法人名	有限会社長建寄り逢い長崎		
事業所名	グループホーム 坂の上の紫陽花		
所在地	長崎市本河内2丁目14番地-15		
自己評価作成日	平成26年1月27日	評価結果市町村受理日	平成26年5月13日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/42/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 福祉総合評価機構
所在地	長崎県長崎市宝町5番5号 HACビル内
訪問調査日	平成26年3月24日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

長崎で平成12年に民間法人としては最初のGH開設して14年目に入りましたが、開設した時の思いが、まだまだ満足できない様に思いました。マンネリ化した現状を打破する必要を感じ、ホームを開設した時の思い、心に戻る事を目標としました。「入居者へ命を守る事の重要さスタッフが入居者の命を本当に守る思いで行動しているのか?も、点検しました。再度胸に手を当てて考え、理念に掲げる主であること。最期まで介護する。当ホームの特徴である、身寄りのない方への、最期でグループホームの法的な役目が終了するのではなく、最期のあと、葬儀から納骨までも、当ホームの理念の中での「グループホームは代理家族である」と言われる通り。家族の代理の事をする事にしました。入居者が望むことがあれば「終焉の家」「終いの住い」となる事にしたいとして、**グループホーム坂の上の紫陽花長崎・終焉の家**と、我々の中だけで名称を仮に追加しました。スタッフに、入居者はここが終焉の家であるので、今までよりさらに、入居者にとって温もりのあるホームにして貰いたいと再確認したかったからです。昨年長崎で起きたグループホーム火災で火災訓練がなされていない事の原因も云われている為、さらに命を守る事を考えて、入居者が万が一異常状態の際に、救急車要請の訓練と、送信の際の病院への対応、フェイスシートを作成し、スタッフの誰が救急車に同行しても、分る様な資料を用意したりし、訓練を取り入れる事にしました。すべて入居者の命を24時間守る為です。また週の2日は入居者とスタッフ共同で手作りパンケーキと手作り餃子を作る事にし、継続をしています。食事時間も手作り談義に花が咲き過ぎられています。また入居者の誕生会も以前はまとめてしていた事を入居者の誕生日の日に「確実」に行ない「次の年には出来ないかも知れない、今年は最後かも」と云う意味をスタッフに指導して尊厳と誠意を込めた誕生会を開催しています。

理念である「高齢者が安心して住める社会づくり」を目指すため、「人間としての尊厳や権利を損なわず、最後までその人らしい有り方」を追求しているホームである。毎日のケアの中で、常に利用者が幸せになるようにという思いが根底に流れている。例えば、誕生祝いは月毎に纏めず、利用者の誕生日に行ったり、おやつ作りにも力を入れている。また看取りに積極的に取組む他、身よりのない利用者の葬儀まで支援している。代表者の「ホームを終の棲家」と考えてもらいたいという思いが、全ての行動に結びついている。協力医とも協力関係を築き、往診や看取りまで適切な医療が受けられる体制が整っている事は、利用者は勿論、家族の大きな安心に繋がっている。また、本自己評価については、各項目、詳細な記載がなされている事からも第三者評価について真摯な姿勢で望んでいる事が窺える。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念での最期までの記載を介護者へ浸透ができていた様になって来た。終焉に近い症状の方への、スタッフの思いやりと、細かな報告や連絡を綿密におこなう事で、明らかに、入居者への介護がより細かく、確実に出来る様になって来た。終焉と思われる方が、その思いと、努力で、長い生命になられている。	理念を基に作成した方針「認知症が重度化しても尊厳や権利を損なわず、最後までその人らしいあり方」を目指すとしている。実際に何例もの看取りを行っている。毎朝FAXで届く施設長からの通達には、この方針を基本とした注意事項が記載され、職員の教育に活用している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	代表者が16歳の頃から住み、親父が元長崎県議会議員であり母親が婦人会長だったため、地元との地域的な付き合いは、ある。代表者の愛妻江口房子施設長は、今年までホームでの仕事を勤めながら、代表者の超人なる理解の元で地域に貢献するためと、自治会会長の願いもあり、地区民生委員を3年間勤めていた。そこで地域とのつながりをさらに深めて行った事と思われる。代表者も自治会とのつながりは深く、監査委員やお宮日の、みこし守の役員となり、長崎に滞在の際は地域との交流をもっている。自治会役員へと、毎年再度再度願われている。寄付行為も地元への貢献金額も多額である	代表者夫妻は、自治会活動に積極的に参加しており、代表は宮日の役員となり、祭りを盛り上げている。事業所は町内会にも加入しており、ホームには回覧板が回って来る。近所の住民から果物の差し入れや日用品の提供があり、地域に溶け込んだホームである。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域のホームとして、町内では、地域推進委員会で自治会の役員が出席され、また民生委員も、参加され。認知症の地域への理解度を深めている。いろいろな地元での行事参加と寄付行為により、地域の方へ介護施設の事業所として、また認知症のみでなく、高齢者への対応や身体障害者の対応についても相談が、頻繁に持ち込まれる。今後も地域の方々が気軽に立ち寄れる雰囲気作り心掛けている。クリスマスの時期には、イルミネーションを点灯させ、地域のその時期の名物視となっている		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	約2ヶ月に一回の定期的な運営推進会議を実施し、市役所役職員、包括支援センター職員、町内会役員、博識者、利用者、法人代表者及び管理者、ケアマネやスタッフで構成し、報告など詳しく写真を使い説明している。参加者委員の意見をサービス向上に活かしている。長崎市民の行方不明などへの、協力も行っている。災害の際の避難場所としている。	年6回開催している。会議では、利用者の状況を医師とのやりとりを含めて詳細に報告している。また避難訓練や通報訓練については、写真や実際の訓練時の録音を聞いてもらう事でより臨場感のある報告となっている。参加者の関心は火災等の非常時の対応についてであり、毎回の詳細な報告に「わかりやすい」との評価を得ている。	

グループホーム坂の上の紫陽花

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市町村担当者と、何かあれば、最大の協力を行う事を常に伝えている為、日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる。また生活保護課が、近年身寄りが無い市民が、認知症になって、どこにも行き場が無い。との事で、当ホームに緊急引き取りをして、保護した経過もあり、何かあれば、桜坂・長崎という、協力体制になっている。2ヶ月に一回の定期的な運営推進会議に市担当者及び包括支援センター職員の方が参加され、また何か必要な時は頻りに連携を充分にとりサービスの質の向上に努めている。市の包括支援職員や市介護保険グループ職員とも、積極的に協力体制を築いているつもりである。	市役所や地域包括支援センターの担当者とは、日頃から手続き等で連絡を密に取っている。身よりのない認知症の利用者を積極的に受け入れている為、担当課と連携体制を取っている。また、介護相談員も受け入れており、頻りにホームを訪れている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束については、 <u>しているとなる</u> 。玄関などの施錠は禁止し、自由に気軽に立ち寄れることが出来るよう努めていたが、名古屋の認知症の老人が列車の事故で720万円の賠償を裁判で命じられるという判決が出た。それなら玄関を施錠しなくて、入居者がこの家庭の者の様に徘徊する行為がもしあったら、法律に記載している事への責任は誰が持つのか？を示すべであり、しっかりと当局が責任を持つという考えであれば、施錠しない事にしたいが、現在は指示が出ないまでは、施錠する事と変更をした。これまで開設以来「 <u>施錠しないホーム</u> 」を我々は理念としていたが、間違いであったと思う。仮に万が一ホームからすぐの道路に出る事故があった場合は、大事故になる事。それがすべて管理する者へ、賠償が来る事をスタッフには伝えていて、理解させ、過去も入居者が無断でホームから出てしまい、警察に保護された件があり仕方なく内部での施錠を行う事にした。それが身体拘束であれば今回の裁判では矛盾が生じる。	言葉による拘束について「だめ」という言葉は使わず、「どうしましたか？」と問いかけるよう職員に教育し指導している。以前は施錠はしておらず、外へ出て行く利用者に対しては引き止めず、さりげなく見守り、同行しながら「疲れたら帰りましょう」と促していた。しかし、ホームの前の道路は交通量が多い為、安全面を第一に現在は、玄関を施錠している。	利用者の安全が最優先であるが、利用者の行動を制限している事は否めない。施錠については、24時間ではなく、時間帯によって開錠する等の取組みに期待したい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	絶対に、高齢者に対して、虐待をしない(暴言も同じ)事は、当たり前の事であり、官庁主催の講習会に参加し、基本的考えを再度学ぶが、それ以前に「人として」、いかなる虐待を見過ごさないよう、スタッフなどにも徹底した虐待防止の管理をしている。常に代表者代理の身内江口房子施設長が、スタッフが介助の身体に虐待形跡が無いかのチェックを常に行なっている。高齢者への虐待など「絶対に見過ごしてはしない」という姿勢がホームの精神である。理念として以前に。		

グループホーム坂の上の紫陽花

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	日常生活自立支援事業や成年後見制度について制度の理解は時間が掛かるが、近年、ほぼ理解している。開設者・施設長や管理者は入居者が日常生活自立支援事業や成年後見制度について利用している為に理解している。ホームの職員にも機会のある度に、説明を行っている。利用者に必要な状態がきたら、官庁や福祉協議会の関係者と話し合いをしている。当然、それらを活用できるよう支援している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	不満が出ない事を、常に心掛けているが、特に利用料の改定時などは、事前に手紙などを郵送し家族等に説明している。不安や疑問点があれば、いつでも十分な説明を時間を掛けて行なう事も、家族等に説明している。そのために入居者家族からの不満は聞かれなくなった。が、今年より全グループホームにスプリンクラー設置が基準となり費用の返済や今後4月消費税の値上げ等で、消費材の値上げも出る為に、当然か？もしかすれば、利用料も値上げをしないといけない事も、想定され、このホームは金銭的余裕、懐に余裕が無い家族が、沢山おられるので悩む。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営に関する利用者、家族等意見が、近年は無い。もし家族から意見や要請が出た時点で、常時江口房子施設長より報告があり、促対応をする事になっている。今後も利用者の状態変化時の連絡や健康面での相談を話し合い、掛かり付けの医師の意見や家族の意見なども運営に反映している。当ホームは利用者の入居期間が長く家族とも親しく悩み等、何でも意見が言える間柄となっている。	利用者とは普段から会話する機会を作り要望等を聞いている。家族は訪問時に管理者等が利用者の状況を話す際に意見・要望等を聞く機会を設けている。その際出た意見等は毎日のミーティングで報告し、対応している。利用者の肌着が誤っていた場合の対応等も直ぐに改善している。利用期間が長い利用者が多く、家族も意見が言い易い環境である。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	スタッフへは、いろんな知識を高める事を、管理者が指導している。運営に関する意見や質問なども、あれば聞き、説明や逆に問いかけも行い、医療関係等の使用方法等は理解度でスタッフがレベルアップしていると思われる。今後もいろんな提案があれば取り入れる事になっている。ただ近年はスタッフも、運営に関しては、わりと無関心と感じる。	代表者・管理者は普段から職員の意見を聞く様に努めている。毎朝と午後のミーティング時には伝達事項・報告事項だけではなく職員からの意見や提案等も出ている。職員の提案を受け、各行事の内容に関する企画主題歌を決めて、皆で歌っている。職員の休み等シフトに関する要望も反映している。	

グループホーム坂の上の紫陽花

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		<p>○就業環境の整備</p> <p>代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている</p>	<p>代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めるのか？については、100%は、出来ていない。問題は介護報酬が少ないために、満足する給与にはほど遠いこと、介護の勤務時間はビジネスマンと違って、時間は決められているが、その時間にびたりと止められるかは、出来ない事であり、労働時間は厳しい。近年の若者たちの考え方は、すべて金であり、やりがいと問われても、報酬が少ない場合は、やりがいも少なくなる様に思う。それが介護する者の離職へと、結びつけているのでは？と思うが、これは利用者の、利用料を値上げすれば解決するののかも、知れないが、簡単に出来るものではない。</p>		
13		<p>○職員を育てる取り組み</p> <p>代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている</p>	<p>ホーム内でケアにおける、その者の能力と力量に応じた実務での優しい言葉での指導が必要である。諦める事なく、資料文書を参考にしてと口頭での伝達指導が重要である事を実践する社内指導をミーティング等で書き入れている。。スタッフを育てる意味でも、介護して終焉まで、終衣の棲み家であると認識させ、このホームでいかにして、医療関係者と協力して介護して、終焉に向わせるかなども機会を設けて肌で感じてを心掛けている。ホームには、資料書として、介護、医療における参考書を買ひ、医療に関する知識なども学ぶ機会を与えている。</p>		
14		<p>○同業者との交流を通じた向上</p> <p>代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている</p>	<p>同業者と交流する機会を作りが不足していると感じている。近年は講習会等の機会と同業者と情報交換をしているのが現状である。現在は医療機関などと情報交換しケアサービスの質の向上に取り組んでいる。グループホーム全国協議会に加入して、現代のグループホームの実態を定期便書類で取り、スタッフにも見せている。市役所介護課より、市内の介護従事者を対象に、講習会を企画されているので、同業者同士での交流機会を持ち、ホーム同士の情報を交換している。が、以前みたいにはホーム同士の交流は少なくなっている。</p>		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	管理者やスタッフが、入居者本人との日頃の介護等で信頼を得て、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている。利用者の話をゆっくり聴き、そばに付き添い入居者との信頼関係が築くよう努力している。年間の行事や誕生会でいろんな自分の意志をはっきりと示す様子を理解し、意思に応ずることになっている。ホーム生活も長く高齢になって来た事で、困ったりした事は言葉には出さない。ホームを江口孝則総括施設長は、管理者より、入居者の普段の生活の中で、自由な言動で、要望などを聴いている。それに最善の事をしたいと常に考え、答えているつもりである。自己満足はしていない。まだまだである。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	平成12年に開設して平成26年4月で、約14年経過するが、代表者の考え方としての指導は、サービスを導入する段階で、最初に「家族がどんなことで困っているのか？」を聞く事において、まだ不満足を感じる様に思っているため、今後も出来る限り初心に戻る様に勤める事になっている。また「利用料など金銭面など」に関しても、出来る限り要望に答えるよう支援している。当ホームは、家族の居ない、身寄りの無い無縁の方が入居されているが、家族と同じ思いで、また人としての最期を安心して迎えられる事への、事業所として出来る限りの努力を行っている。入居者によっては、身元引き受け人も無い入居者もあり、終焉の際のその後の事も世話する事が多いので、入居者の要望も細かく聞いておく事になっている		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	何が一番必要としているのか見極め、安心した生活を送れるように、介護していて観察し「出来る事。出来ない事」を見定めして、支援している。が、他のサービス利用も含めた対応に努める事も、必要であるが現在無いのが現状である		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ホームの「理念」にあげている通りであり、利用者の尊厳を尊重しながら支えあう、信頼できる家族同様の関係を築いている。介護されるだけでなく、暮らしを共にする者同士の関係、それがグループホーム基本である。だが、それも我々の自己満足かも知れないと、「自問自答」しながら、スタッフが自己満足的な自己判断をすることが無くうめぼれる事なく。を今後の我々の課題と思っている。入居者の表情を見てもらえればわかると思う。		

グループホーム坂の上の紫陽花

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	開設して以来、常に「家族の関係を常に基本」として、スタッフへも考えを細かく、伝えて来ている。身元の引き受け人のいる家族の居る者、家族がいても見放されて居る者、無縁の者など、家族の支援はいろんな例が有るが、共に支えて行き事については事業所として出来る限りの努力を行うことと、している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている。事へ、つながりの扉を閉じる事なく、支援して行く事を、当然努力している。	知人や家族が事業所に訪問する事が多い。墓参りや家族の月命日に自宅に帰宅する際は職員が同行する事もある。また、利用者が馴染みにしている理美容室の継続利用や商店街への買い物に同行し、関係が途切れない様に職員全員で支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が同士の関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ホーム内で、入居者同士が、会話や見守りなど、安心して笑顔に、胸を打たれる事もある。一人一人が孤独を味う事が無いホームが、理想であり、スタッフの入居者への思いやりが、入居者にも伝わっている様な気がした。無言であってもお互いの立場を分かり合っている者同士と思われる。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後は、当ホームとは関係なく、途切れる事が真実である。町で元入居者と逢うことがあるが、その時は声掛けをしている。その方の行き先の施設の考えもあるだろうと推察し、それ以上には突っ込んだ話しはしない。退去されてから短期間に死亡記事がある事もあるが、心痛む。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりの思いや意向を把握し、外出や趣味への支援などを本人本位に検討する様に努めているが、理想と現実には難しい事が多い。室内への持ち込み家具等で希望を把握している事もある。あまり不満も言わない。	普段の会話やフェイスシート等から利用者の思いや暮らし方の希望を聞く事で内容を把握する様に努めている。発語困難な利用者の表情や仕草だけでなく、家族からの意見等を参考に検討し対応する事としている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	介護計画書等で、フェースシートで分かる範囲で入居者の一人一人のバックグラウンドを調べ、これまでの経過を把握する事にしている。また日頃の会話で経過バックグラウンドを知りその人らしく暮らせるよう出来る限り努力して支援しているつもりである。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの一日の過ごし方の把握は、個人日誌などで行っている。毎日の様子を元に心身状態、有する力等の現状の把握に努力し努めている。		

グループホーム坂の上の紫陽花

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	管理者兼施設長が入居者本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、総括施設長やスタッフなどの意見を取り入れている。本人、家族、必要な関係者と話し合いについては、家族の意向は聞く事になっている。	利用開始時のフェイスシートを基に、その後の情報を取り入れ介護計画書を作成している。家族の要望は来訪時に聞き取り、計画に反映している。計画の実施状況は個人記録に記し、モニタリング後、カンファレンスを行い職員の見解をまとめている。但し、会議の際の具体的な意見等を記録した議事録は整備していない。	モニタリングからカンファレンスの検討内容について議事録を作成し、利用者の計画作成についての経緯を明確に示し、計画へ反映する事が望まれる。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子を個別に個人日誌などで記録し、スタッフ一人ひとりの入居者への気づきなどを、記入している。介護計画書の見直しに役にたっている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	難しいといえる。一人ひとりを支えるための事業所の多機能化については、当ホームは取り組みがまだしていないため、今後の課題となる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	一人ひとりの暮らしを支え、日々の楽しい生活を送れるよう支援しているが、地域資源を把握してはいるが、当グループホームとして、認知症の入居者へどのような支援が出来るのか？を検討課題としている。安全で豊かな暮らしの楽しみが、どのような事かも当ホームでは、課題である。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	当ホームの、唯一と自慢出来るのは、掛かり付け医師の白髭医師と影浦医師という、地域の2名の存在である。ホームへの定期検診がなされている。また皮膚科や諏訪の杜医院精神科の医師も、ホームに定期的に往診され、入居者の対応が常に行き届いている。本人や家族の状況に応じ、医師への受診へ同行なども継続しながら、またその他にも適切な医療を受けられるよう2人の掛かり付け医師の支援を受け、毎週柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組む様に努力している。定期的に診療に来訪されている為、適切な医療を受けられるように支援している。健康状態や急変時など24時間かかりつけ医師に報告し、協力病院に依頼など、適切な医療を受けられるように、万全な体制で安心した入居者への支援を行なっている。	基本的には、提携医療機関である内科、皮膚科の医師による往診を定期的を受けている。また、歯科や眼科、精神科の受診支援も行っている。以前のかかりつけ医への通院も尊重している。家族が受診の付き添いをする場合も必ず職員が同行し、利用者の状況を把握している。夜間や緊急時とかかりつけ医との連携体制が整っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療加算の手続きはしていない。かかりつけの医師がその代わりにされている。		

グループホーム坂の上の紫陽花

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、直接看護師や医師と病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。掛かり付け医師の紹介で入院が出来、紋段無く病院へ搬送して入院となっている。またその他の病院へも、入居者の受診している関係で、問題なく病院への入院が出来、心強い。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行う事を、行う様にしている。看取りに関して契約書に明記し、家族に同意書もいただき、職員にもホームの方針を説明している。また、身寄りが無い入居者に関しては、事業所として、ホーム開設以来の考え方としては、「人としての最期を誠意を持って行うことを、当ホームでの基本としている。無縁の方が年間に数名、死去されているが、考え方通りに、すべての事、葬儀及び納骨までの期間の安置を総括施設長がスタッフに指示し、行っている。理念での書き入れどおり、長年の歴史でもホーム入居者がグループホームとは最期までの介護が当然であるべきであるとしている。	重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行う事を、行う様にしている。看取りに関して契約書に明記し、家族に同意書もいただき、職員にもホームの方針を説明している。また、身寄りが無い入居者に関しては、事業所として、ホーム開設以来の考え方としては、「人としての最期を誠意を持って行うことを、当ホームでの基本としている。無縁の方が年間に数名、死去されているが、考え方通りに、すべての事、葬儀及び納骨までの期間の安置を総括施設長がスタッフに指示し、行っている。理念での書き入れどおり、長年の歴史でもホーム入居者がグループホームとは最期までの介護が当然であるべきであるとしている。	看取りに取り組んでいる事は入居時に家族に説明し同意を得ている。本人・家族の意志を尊重し、看取りを行う方針を変更し延命治療へ変更した事例もある。看取りについて家族の意向を把握するため、アンケートを取っている。また、身よりのない利用者に対しては、通夜や葬儀まで行い、理念である「最後までその人らしい有り方を目指す」を実践している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応法を定期的に訓練し、初期対応がスムーズに行えるよう常に訓練しているが、それでもまだまだ完璧でなく、教育している途中であるし、不足であると思われる。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	当ホームは、基準の延床面積以内の為、スプリンクラーの設置がされてなかったが、設置する事に強制的となり、今年3月に設備を完了とする事にしてるが、火災だけが災害では無いとの為に、入居者の災害の避難訓練においては神経質になっている。毎週一回は火災設備を利用した「避難訓練」を行なっている。スタッフが疲れる事もあるが、入居者の命を守る為には必要な事であり、説得をしている。施設長1名の甲種防火管理者講習を受け、地域の火災・避難訓練や地域の災害訓練に参加し日頃より実技を行っている。また江口総括施設長は現役の消防団員である。夜間はスタッフ一人体制であり避難が困難と想定して、近隣の江口家にも協力を願っている。江口房子施設長は隣りに住んでいる為に、すぐにも駆けつけられる態勢にして、24時間携帯電話を肌身離さずに置き、爆眠している事も想定し、別に緊急ボタンを枕元に置き、夜間でも、便所に行かない限り約2分で駆けつける事になっている。	施設内は、禁煙である。職員は禁煙に対する誓約書を毎月提出しており、火災に対する危機意識が高い事が窺える。木造建築というリスクを考慮して、避難及び通報訓練を週に1度行っている。訓練手順を詳細に作成し、訓練後の反省や手順の見直しも職員が行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	理念に基づき、スタッフへ新人研修で一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけに配慮した言葉かけを行う事を教育している。	新人の入社時に、守秘義務と尊厳について代表が講話している。特に利用者の呼び方については、ちゃん付けやニックネームで呼ぶ事は禁止しており、さん付けで呼ぶ事を徹底している。利用者の介護記録は、所定の場所に保管している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	出来るだけ、利用者の希望や思いを把握して一人ひとりのペースを大切にしているし、自己決定できるように働きかけている。が、長年ホームに入居している人が多く、自由な為、結構自己主張が多すぎる。事もある。が「自由に言える」のについては、それもありたい事であるかも知れないと思っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員側の決まりや都合を優先せず、利用者の希望に出来る限りそって支援している。が、身体を動かない事があるため、毎日時間を決めてスタッフと触れ合い活動で変化のある日常の暮らしとしている		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	利用者一人ひとりの個性に合わせて、その人らしくおしゃれが出来るよう取り組んでいる。散髪にも希望者は行ける様に、している。衣服も個人の意志を尊重して自由にしてもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事が楽しみなものになるよう好みなどを取り入れ、栄養バランスにも気を使っている。が入居者の希望より、スタッフの食べたい希望を取り入れる為、一週間に2日は利用者と職員と一緒に手作りギョウザやハンバーグ等、食事作りをしている。	利用者各々の好みを把握し献立を作成している。調味料も減塩醤油やいりこで出汁を取る等、健康面を考慮して調理している。時には出前を取る事もある。また、花見などの外出時には弁当を作り、戸外で食事を楽しんでいる。職員と利用者が一緒に手作りのお菓子を作る時間を大切にしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食べる量や栄養バランス、水分量、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をし、個人に応じた食事量と1日の水分量などを日々の記録に明記している。一年中、生野菜だけは摂取が基本としている。料理は技量もあるが味においては努力の要素がある。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	基本のご誤の恐れもあるために、夜食後に口腔ケアは行う。また本人の力に応じ口腔内の清潔保持に努めている。		

グループホーム坂の上の紫陽花

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	定期的時間的にでなく、一人ひとりの排泄パターンを把握し、支援する事により、一人一人の失禁を出来る限り少なくなるよう支援している。	排泄チェックシートに利用者毎の状況を記録し、各々の排泄パターンを把握している。時間や利用者の仕草から職員が声掛けを行いオムツからパッドに軽減したり、失禁が減少した事例がある。トイレでの排泄を継続できるよう職員は支援に努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	定期的にホーム内でのレクリエーションで、無理のない体操などの運動を行い、便秘予防に努めている。毎日便の状態を詳しく(色、堅い柔らかい?回数)排尿も色、回数の確認をしている。便秘の理由も原因等をスタッフのミーティングで報告などをして、一人一人の様子を把握することに、指示をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴は月水金の週3回としているが、冬季は週2回としている、状況に応じて、入浴日にこだわることなく、入浴は可能としている。入浴出来ない者へは「足湯」を行っているが、足湯の設置をする事になってから数年たつが、足湯が入居者の楽しみになっている。入浴は一人ひとりの希望に沿った湯温度に設定している。	入浴は週3回の午後からであるが、利用者の状況に応じて対応している。入浴日以外の日には足浴機を使って利用者への支援を行っている。利用者に合わせた温度を設定し、利用者が入浴を楽しみにしている。体調が悪い場合は、清拭で対応している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	自由な生活が出来る事が当ホームの特徴であるため、休憩したり安心して休まれるよう一人ひとりにあった生活環境を最善の提供している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居者の一人一人がどんな薬を飲んでいるのかは、常に説明をして理解させている。毎食後服薬の確認をし記録をしている。また薬の、副作用などの変化に注意し用法などの理解をしている。ミーティングで説明等をしている。また間違った服薬がスタッフに無い様に、入居者の薬を一人一人分かりやすくしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日々の会話の中から趣味や生活歴を、なにげなく聞き出し、その過去を思いだしたりした、生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、の会話等で、楽しみごとにつながるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩などを行い季節の行事を企画し、花見などを行事の中に取り入れ外出の機会を多くしている。入居者も高齢になりあまり外出を誘って外出を喜ばれないが、入居者と共に出掛ける等は行なっている。春になれば近隣の散歩などもしている事を、自立する意味で、支援している。入居者が家族と外出する要請にも、すべて支援している。	天候・利用者の体調・希望に合わせ近隣の散歩を支援している。また、季節に応じた行事に合わせ、外出する機会を作っている。行事によっては家族と一緒に外出する事もあり、楽しみとなるよう職員が支援している。車椅子利用者にもその時の状況等を検討した上で、外出を支援している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居者がお金を持つことはしていないが、欲しい物があれば、スタッフが買って来る様にしている。ホームで立て替える方式にしている		

グループホーム坂の上の紫陽花

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話など自由に利用している。が、掛ける事は無い。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	リビングから、ガラス窓であり、四季折々の流れが感じられる様になっている。例えば前方の山が山々の桜や紅葉が見られる部屋に隣、季節感め込み絵の様になっており、利用者にとって極楽の場所である、また共有空間では室内に犬と野良猫が住み着き仕方なく飼っているが、入居者の癒しに繋がっている。	純和風の建物を利用している為、昔ながらの我が家で暮らしている雰囲気である。リビングには広いテーブルが置かれ、食事をしたり、誕生会等のイベントの時には皆が集う場所となっている。壁には似顔絵や写真が飾れ、楽しい空間となっている。テレビの前のソファは利用者の寛ぎの場所になっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	民家を改築して家庭的な雰囲気の中で生活していただけるよう支援している。気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。入居者同士のトラブルも無い。女スタッフ同士のトラブルも玉にはあるが、それも楽しい笑いの話題になっている。男性入居者の暴言もあるが、認知症の良い点で、こだわりが 続くことは無い。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人や家族と相談しながら、使い慣れた家具などを自由に持ち込んでもらい、以前の環境と出来るだけ同じにする事もしながら、本人が居心地よく過ごしてもらえるよう工夫している。	殆どが和室で、中には床の間がある居室もあり、落ち着いた空間となっている。家具の持込みは自由であり、思い思いに使い勝手の良いよう工夫している。夜間のみポータブルトイレを利用している居室があるが、昼間にも目につく場所に置かれている。	ポータブルトイレについて、昼間には目立たないような工夫し、利用者にとって更に快適な居住空間となるよう期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり	入居者の安全性を考えながら、配膳や食器洗い、洗濯物の整理など、一人一人の力に応じた、環境作りに努めている。出来る限り役割がある。入居者に取っては「分かりやすい事をも目的とした表示」を付けたりして、一人ひとりに合った生活環境を整えている。		